

雫石・戊辰戦争 150 年記念行事 3

講演会「柳は萌ゆる…人間榎山佐渡の決断」終る。

当会主催事業「戊辰戦争 150 年「雫石口・橋場の戦を語り継ぐ」行事」を締めくくる、【行事その 3】—作家・平谷美樹（ひらや よしき）講演会「柳は萌ゆる…人間榎山佐渡の決断」を 9 月 23 日（日）午後 1 時 30 分から雫石町野菊ホールで開催しました。

講師の平谷さんは 2016 年から 18 年 2 月まで岩手日報紙に連載の榎山佐渡の半生を描いた小説「柳は萌ゆる」の作者です。

当会の「—語り継ぐ」行事は、初回が 9 月 2 日の事前学習会「戊辰戦争と雫石」〔知る〕。およそ 100 人が出席し戊辰戦争の経緯と雫石での出来事を学びました。二つ目は 9 月 16 日の「町内の戦跡・ゆかりの地を巡る」見学会〔見る〕。午前・午後の 2 回、合わせて先着申し込み者 50 人（スタッフ各 5 名含む）が参加しました。

そして第三弾がこの講演会〔考える〕。盛岡藩を秋田戦争に導いた家老榎山佐渡の決断の背景などについて小説「柳は萌ゆる」の作者が語りました。以下その要旨です。



【平谷 美樹 ひらや よしき】

2017 年岩手日報紙連載小説「柳は萌ゆる」の作者。
歴史時代作家クラブ会員。日本 SF 作家クラブ会員、宇宙作家クラブ会員、日本推理作家協会会員でもある。大阪芸術大学芸術学部美術学科。岩手県の公立中学校美術教師を退職、2007 年から専業作家。姥捨での風習を描いた「でんでら国」が書店が選ぶくさわベス 2018 文庫編 2 位に選ばれた。本年『東北の道しるべ』本 100 冊に選定。最新作「鉄ヶ崎心中」（小学館）。1960 年・久慈市出身。金ヶ崎町在住。

平谷さんはおおよそ 170 人の聴講者を前に、「私は作家、歴史研究者ではない。細かいところは作り話もある。」と前置きして笑いを誘った。

最初に「私の基本姿勢」「前置き・我々は何者か」について話した。（内容は省略。）

平谷さんは榎山佐渡を書こうと思った理由を「三閉伊一揆で盛岡藩領民が仙台藩に越訴した事態を收拾した佐渡の能力と人間性にひかれた。武力で他を圧倒する時代、権力者たる家老が一揆の領民たちと対話をして物事を決めていく姿勢を持ち、それが藩の一揆への対応として定着していったところにく民主主義の萌芽>を見た。」と語った。さらに、領民への温情や質素儉約を巡る家族への人間味あふれる態度など謹厳実直な武士の典型とされる佐渡の別な一面を見たことも書くきっかけの一つだったと話した。

また、なぜ佐渡は秋田と開戦したのか、という点については「秋田に進軍していた総督府（朝廷）に弓引くつもりもないし、古くからの隣国秋田に敵意を持ったのでもない。佐渡はその背後にいる薩長に対して嫌悪感と敵愾心を持ったのだと。」とし「京都で接した薩長藩士たちの粗野な言動から『“倒幕”のみで新しい国の姿をまったく考えていない』と痛感した佐渡は『薩長の尊皇は真の尊皇に非ず』と確信し、薩長が政権を取ればこの国は百年、二百年の計を誤ると考えた。仙台藩からの強迫もあっただろうが国の行く末に危機感を抱いたことが秋田開戦を決意した最も大きな要因だと思う。」と語った。

平谷さんは「佐渡が案じたとおり戊辰戦争は単に侍間での政権交代の戦いに終わった。

“明治維新”に欠けたものは<民衆の力>だった。民衆はただ振り回されただけ。」と断じ、「現在も続く『為政者と民衆の乖離（かいり）』は明治維新の延長線上にある。小説『柳は萌ゆる』にはそうした現代社会への批判も込めた。」とも語った。

最後に、小説「柳は萌ゆる」で描きたかったことについて平谷さんは「それは未来へ“希望”を繋いでいくとい

うことだ。岩手は古くは『蝦夷（えみし）』の時代から厳しい風土の中でも高い文化性を有してきた。平泉文化然りである。明治以降多くの内閣総理大臣を輩出してきている。文化人もそうだ。特にも佐渡が活躍した幕末の頃に盛岡藩に生まれた人々の中に優れた人が多かった。原健次郎（後の原敬）もその一人である。家庭や藩の教育がしっかりしていたのだと思う。

小説の最後は盛岡の報恩寺において佐渡が切腹の場に向かう場面である。佐渡を慕っていた原健次郎が処刑の刻限頃、報恩寺の回りを歩き回っていたという逸話をもとに、健次郎に清々しく『佐渡様、あなたのめぞす国を私が造ります。』と叫ばせ、刑場に向かいながらこれを聴いた佐渡が心穏やかに『柳は萌えておりますな。』とつぶやく、というラストシーンを創作した。」と思いを込めた。原健次郎を柳の若葉に喩えたのだという。

平谷さんはさらに「現在私は県内の高校生たちに小説の書き方を指導しているが、岩手、盛岡の高校生のレベルは極めて高い。何より物事に真剣に向き合う姿勢がいい。私たち大人の役目は、こうした若い力、つまり”未来への希望”をたいせつに育てていくことだ」とこの小説『柳は萌ゆる』を書いて改めて強く感じている。」と講演を結んだ。

（文責・滴石史談会事務局長 関 敬一）



この後、会場の4人から質問があったが、失礼ながら紙面の都合で省略する。

